

公民社会と  
人民社会

今年の夏、中国各地の気温が異常に高い。同時に、社会に対する報復的な刑事事件も例年より多くなった。7月20日、北京空港で、爆発事件が発生した。事件の容疑者は、山東省出身の冀中星氏で、重傷を負った。彼は2006年に広東省で公安関係者に殴られて半身不随の状態になり、数年間の賠償陳情を無視された末、この大きな事件を起こした。

当然、北京空港での爆発事件は、国内外で注目され、中国の媒体が冀氏の故郷と広東省を取材した。冀氏が住んでいる村は貧困な農村で、記者が彼の部屋に入ると、悲惨な状況が目に入った。冀氏は、半身不随の不自由な生活で、部屋の酷い悪臭のため村の人々と遠く離れ、家族も面倒を見きれない。彼が北京空港で起こした爆発の目的は、自分の生命を失うという代価で社会から注目される事である。

現代社会は、自由市場経済、自由選挙

ができる民主主義制度と成熟な公民層という三つの条件を揃えるといわれている。今の中国には、三つの条件の中、市場経済の部分は半分あるかもしれないが、他の二つは、皆無ともいえる。

日本では、人民という表現は使われず、公民・市民という表現を使う。一方、中国では、人民という言葉をよく使い、例えば、役所でよく「人民に奉仕する」というキャッチフレーズを壁に書いてある。公民と人民の区別とは、公民は個別的、自立的で、人民とは集団的、付属的な存在であるということだ。

中国の役場の役人は何時も態度が悪く、もし、庶民が「人民に奉仕する」に指



さして、「どうして人民に奉仕しないのか？」と聞いたら、役人が貴方は一個人で、人民ではないと答えてくる。民主主義社会の場合には、権利と義務を持つ公民が、態度の悪い役人に対して要求することは当たり前である。

人民社会と公民社会の人の差は、はっきりしている。日本の東北地震と中国の四川地震の救援活動に参加した在日中国人が、日本の被災者は、地震直後自立的に周りの人の援助を展開したが、対照的に、中国の被災者は何もせず、国の援助を待つだけであると感想を述べた。

この二、三十年の間、中国の社会構造が大きく変わり、冀氏のような社会的弱者が数多く存在するようになった。彼らに対して、政府からの賠償と社会の援助システムが必要である。しかし、全体主義的な国家中国には、結党、結社の自由がないから、ボランティアのような自立的な奉仕団体も少ない。競争社会で生きていけない弱者が、腐敗した効率の悪い政府に向けていくら要求しても、無駄である。

現代社会には、自由競争があると同時に、民選により市民に奉仕する政府と自立的に社会活動に参加する公民層は、不可欠だと思ふ。